

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 波多野 文

論 文 題 目

言語的機能と非言語的機能のモジュール性に関する研究：  
言語陰蔽効果の生起メカニズムの検討

### 論文審査担当者

主査	名古屋大学大学院環境学研究科教授	川口 潤
委員	名古屋大学大学院環境学研究科教授	唐沢 穰
委員	名古屋大学大学院環境学研究科准教授	北神慎司

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、対象を言語化することがその後の記憶の想起に与える影響を、言語陰蔽効果と呼ばれる現象を取り上げて、心理実験および計算機シミュレーションを用いて明らかにしようとした研究である。言語陰蔽効果(verbal overshadowing effect)とは、顔などの非言語情報を記憶した後に言語化すると、その後の記憶想起がかえって不正確になるという現象であり、その背景メカニズムについては明確にはされていない。本論文では、言語陰蔽効果のメカニズム解明とともに、言語的処理と非言語的処理に関するモジュール性についても検討することを目的とした。

本論文は六つの章で構成されている。第一章および第二章では、言語陰蔽効果を中心として、言語情報の処理と非言語情報の処理に関する認知心理学研究について展望し、それぞれが独立したシステムによってなされているとする立場と一つのシステムによって処理されている立場があることを示した。また、言語陰蔽効果のメカニズムに関して再符号化干渉説と転移不適切性処理シフト説を紹介し、その違いを明確にした。再符号化干渉説とは、記憶の言語化を行う段階で不正確な表象が生成されるという考え方であり、転移不適切性処理シフト説では、言語記述を行うことで非言語情報の処理に必要な処理システムが利用できなくなるとするものである。

第三章では、顔の再認課題を用いて、言語化される情報による違いが言語陰蔽効果に与える影響を検討した。研究 1, 2 においては、顔の部分情報を言語化した場合には言語陰蔽効果が生じたが、全体情報を処理した場合には見られないことを示した。研究 3, 研究 4 では、目、鼻、口、眉といった部分情報の顕著性によって言語陰蔽効果生起が変動することを明らかにした。第四章では、並列分散処理 (parallel distributed processing: PDP) モデルによる言語陰蔽効果のシミュレーションを行った。研究 5 では再符号化干渉説にもとづくモデルを構築し、研究 6 では言語化により再認成績が低下することを示した。第五章では、記憶対象に関する熟達度によって言語陰蔽効果の生起が異なることをクラシック音楽の記憶実験で見いだした。第六章では、以上の研究成果をふまえて再符号化干渉説と転移不適切性処理シフト説の妥当性、言語陰蔽効果の生起メカニズムについて考察した。

本研究は以下の点が評価できる。第一に、言語陰蔽効果の背景メカニズムを精緻な心理実験を積み重ねることによって明らかにしたこと、第二に、言語陰蔽効果に関して初めて計算機シミュレーションを用い、これまで曖昧であった要因を明確にしたことである。審査委員からは、モジュール性に関するさらに深い議論が必要ではないかなどについて質問があったが、本研究の知見は非言語情報の言語化に関するメカニズム解明に大きく貢献する研究として重要であることが議論された。

以上のように、本研究は言語陰蔽効果という非言語情報の言語化に関わる要因を実験的手法および計算機シミュレーションによって明らかにしたという点で心理学の発展に大きく貢献した。よって本論文の提出者波多野文君は博士(心理学)の学位を授与される資格があるものと判定した。